

機関番号：32660

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520247

研究課題名（和文）小説に投影された大英帝国の不安

—19世紀末から20世紀初頭の英国小説をめぐって

研究課題名（英文）Anxieties of the British Empire Reflected in the British Novels in Late -19th Century to Early 20th Century

研究代表者

松本 和子 （ MATSUMOTO KAZUKO ）

東京理科大学・工学部第一部・准教授

研究者番号：90385542

研究成果の概要（和文）：衰退期にある大英帝国の不安が同時代の小説にどのように反映されているかを分析・考察した。成果の概要としては、国家としての不安が登場人物のアイデンティティクライシスに投影されている事例を具体的に示せた点があげられる。時代が要求する男性性を体現した人物を目指す自己と、男性性とは相いれない要素を多分に持つ内面的自己との葛藤に自己確立を阻まれた結果、自己破滅に陥る登場人物がコンラッド、キプリングの小説に繰り返し描かれるのはその一例とみなせる。

研究成果の概要（英文）：Focusing on a period during the decline of the British Empire, this three year study attempted to examine how the anxieties of the Empire were reflected in the British novels of the same period. Close readings of works chiefly written between the late 19th century and the 20th century led to a revelation that the Empire's anxieties of the period were being expressed in the identity crises of many of the fictional characters of that period. Male characters repeatedly presented by Joseph Conrad and Rudyard Kipling are typical examples. Their characters often suffered from a conflict between an expected outer masculine self and an anti-masculine inner self. The conflict led them to identity crises which often resulted in self-destruction.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	400,000	120,000	520,000
2010年度	260,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	1,260,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：英米・英語圏文学

キーワード：英文学

1. 研究開始当初の背景

繁栄を極めたヴィクトリア朝のプラスとマイナス両面の遺産を受け継ぐ宿命にあったエドワード朝への強い関心と、大英帝国の強力なイデオロギーから距離を置くことが困難な同時代を生きる作家の活動に興味を惹かれたことが研究に着手する動機となって

いる。過去に、エドワード朝の小説にはヴィクトリア朝最盛期の小説に顕著だった進歩や発展に向ける信念が希薄になり、悲観的ヴィジョンが支配的になってきた過程を探った経験があるので、その時に得た理解を活かすべく、悲観的ヴィジョンの中から「不安」という具体的切り口を選択し、帝国衰退期に

漂う不安が同時期の小説にどのように影を落としているのかを考察しようと考えた。

2. 研究の目的

研究期間が三年ということ踏まえ、各年度に一つずつ目的を設定した。

- (1) 小説に顕在している「不安」の分析
- (2) 小説に隠ぺいされている「不安」の解明
- (3) 大英帝国の「不安」と小説に描かれる「不安」における相関関係の考察

(1)については Rudyard Kipling の作品、(2)については、Joseph Conrad の作品を中心にした19世紀末から20世紀初頭にかけての小説研究に主眼をおく内容を意図しているが、(3)については、広く社会の動向を視野に入れ、研究期間全体の総括の意味をもたせることを念頭に置いた。

3. 研究の方法

最初の二年度は前半・後半の半期制をとり、最終年度のみ通年での研究を行った。国内に滞在しての研究活動がほとんどを占め、入手困難な文献資料収集時のみ長期休暇を利用して海外へ出張した。方法の概略は以下の通り。

(1) 2008 年度前半

“不安の諸相の検証”というテーマを立て、Rudyard Kipling の小説群、特に不安の要素が色濃く出ている後期の作品の精読を優先した。これに並行して行ったのは先行研究資料の収集で、①Kipling とほぼ同時代に出版された批評 ②いわゆる Kipling 不遇の時代、つまりあまり積極的に作家・作品研究がなされなかった時代の批評③さまざまな批評理論、特にポストコロニアリズムの台頭に伴い、Kipling の再読・再評価が積極的に行われ始めた時代 ④③の時代が終息に向かいだした頃から現在に至るまでの四種類に分類しながら進めていった。

(2) 2008 年度後半

前述の資料整理と分析を続ける一方で秋に提出する論文（「非男性的な登場人物の提示—*The Disturber of Traffic* の場合」）の執筆に時間をかけた。作家の内面を探るために、伝記と書簡集、研究書については psychoanalysis に依拠した論文を重点的に扱った。2009年3月には学会出張と日程をあわせて渡英し、複数の大学図書館において①定期刊行物 ②協会発行誌 ③不安が視覚的に表されている雑誌挿絵の閲覧と可能な限

りの複写を行った。

(3) 2009 年度前半

“後景化された masculinity “の前景化をテーマとし、時代的に前年度に焦点をあてた Kipling の周辺に位置する Joseph Conrad の作品を研究対象に据えることに決定した。具体的には執筆活動前期に描かれた短編集 *Tales of Unrest* の精読を出発点に、①継続研究として Kipling の短編、②親交のあった G. Galsworthy、H. G. Wells の作品と評論 ③Conrad の書簡集、日記などの精読を行った。時代精神の投影をみることのできる *Tales of Unrest* には短編が五編 (*Karain: A memory, The Idiots, An Outpost of Progress, The Return, The Lagoon*) 収録されているが、アフリカにある進歩の前哨基地で任務に就く白人男性の救いようのない末路を描いた *An Outpost of Progress* を当該年度提出の論文で論じることにした。

(4) 2009 年度後半

論文執筆（『進歩の前哨基地』における脇役の機能—駐在員の死をめぐる—）に時間をかけた後、19世紀後半から20世紀前半にかけての文化事象や思潮についての知識を深める目的で、国内の学会・ワークショップに積極的に参加した。特に最終年度に扱う20世紀前半については、第一次世界大戦突入への過程を社会背景を通じる必要があるため、DVD や写真集などのメディアを利用した。

(5) 2010 年度

研究活動最終年度にあたるため、

①進行中の計画の遂行

②2008 年度以来の取り組みの総括

③次年度以降の研究テーマの模索・選定

という三つのテーマにしたがって研究を行った。5月に学会発表（復讐の意味—「メアリー・ポストゲイト」におけるメアリーの変貌）が控えていたため、前半は Kipling 作品の再読と第一次世界大戦時下のイギリス社会に関する資料の読み込みに費やした。この過程を通じて得られた理解を活かすために、当該年度の論文は同作品を別アプローチで論じることになり、発表後まもなく論文執筆の準備を進めた。研究期間中、初めて女性登場人物に的を絞った結果、女性登場人物の抱える不安と社会不安とのパラレルな関係が感じられた。そこでこのパラレルな関係を裏付けるために今後の研究展開の可能性を探ろうと「女性と暴力」を念頭に置いた文献購読を論文（「*Mary Postgate* におけるメアリ

一の復讐と自己実現) 提出後に開始し、現在に至っている。

4. 研究成果

主な成果について研究年度ごとに分類して記す。

(1) 2008 年度

①帝国の衰退の社会不安と masculinity に欠けた登場人物の台頭には相関関係が存在すること

②帝国主義者としての言動を躊躇なくとっていた、あるいは少なくともそのようなイメージを広く社会に与えていた Kipling が、帝国主義的価値観に背を向けた人物を複数創造し、しかも彼らを断罪していない事実

③帝国主義のアンチテーゼともいえる男性性に欠けた男性登場人物を排斥しなかったリーディングパブリックの姿勢

がそれぞれ明らかになった。

(2) 2009 年度

①帝国主義の担い手としての意識がある人物にですら大英帝国の衰退と崩壊は忍び寄る影として自覚されていた当時の一般社会状況の確認

②小説内で起こる二人の駐在員の死は、大英帝国の衰退と共に人心を蝕みはじめた倦怠感とその倦怠感が生じる根本原因ともいえる精神的脆弱性を暗示しているという理解

③植民地経営で勝ち組とみなされるヨーロッパ列強の中にあっても、帝国主義の名の下に犠牲者に転じる人々がおり、彼ら／彼女らは無慈悲に切り捨てられていたという実態の把握

がそれぞれ可能になった。

(3) 2010 年度

①男性に対して、「masculinity を具現化したような人物」になるよう仕向けた時代の要請は、女性に対しても母性にあふれた「帝国の母」になるよう方向づけるかたちで存在していたことの確認

②時代の要請に自己同一化を図れない女性の多くは強力な抑圧により自己を時代に合わせていたが、中には精神に破綻を来す者もいたことの確認

③②のような人物は、作家に人物創造上のヒントを与えた可能性が強く、自己破滅に至る

女性を描いた作品が多く執筆されていることの実事確認

がそれぞれ行われた。

国内外における位置づけとインパクトについては、小説というフィクションの世界を舞台とした個人レベルでのアイデンティティクライシスが、現実の中で時々刻々と進行している大英帝国自体のアイデンティティクライシスと同時進行している点を具体的な事例をともなって示せた点に意味があると考えられる。

今後の展望については、現実社会において大英帝国の繁栄を存続させるために「帝国の母」であることを期待された女性たちの葛藤がどうかたちで小説に織り込まれているのかに考察を加えていきたい。「大英帝国」「帝国主義」「女性」「抑圧」「葛藤」「自己実現」といったキーワードが全体の構成を考える際のヒントとなりうる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

1) 著者名: 松本和子

論文表題: Mary Postgate におけるメアリーの復讐と自己実現
雑誌名: 一橋大学『人文・自然研究』
No. 5 pp. 310-329 2011 年刊行
査読 有

2) 著者名: 松本和子

論文表題: 『進歩の前哨基地』における脇役の機能—駐在員の死をめぐる—
雑誌名: 『東京理科大学紀要教養篇』
No. 42 pp. 173-192 2010 年刊行
査読 有

3) 著者名: 松本和子

論文表題: 非男性的な登場人物の提示—The Disturber of Traffic の場合—
雑誌名: 一橋大学『人文・自然研究』
No. 3 pp. 308-324 2009 年刊行
査読 有

[学会発表] (計 2 件)

1) 発表者名: 松本 和子

学会名: 日本英文学会第 8 2 回大会
標題: 復讐の意味—『メアリー・ポストグイト』におけるメアリーの変貌

発表年月日：2010年5月30日
場所：神戸大学国際文化学部

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本 和子 (MATSUMOTO KAZUKO)

研究者番号：90385542

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：